



図1 「は組の出初」(東京消防庁蔵)



図2 「名所江戸百景第5景両ごく回向院
元柳橋」(菅原進一氏提供)

京文化が漂う華やかさ溢れる舞妓さんの御見世出しや御年始のご挨拶回りなどの初行事は、四季豊かな日本の風物詩であると同時に、このいやさか(彌榮)を凜として祈念する日本人の精神を象徴する一光景である。正月が始まらないと言われる消防出初は1月の初旬に全国各地で実施されている。2015年の東京消防出初式は1月6日に実施予定で、主な式次第は、消火・救助など実演技、機械部隊の分列行進、江戸消防記念会の木遣り行進・梯子のり、音楽隊・カラーガーズ隊の演奏演技、来場者の消防車両や起震車体験などであり毎年大賑わいである。

出初の起源は万治2年1月4日(1659年2月25日)に遡り、老中稲葉伊予守正則が定火消総勢4隊を率いて上野東照宮前で挙行したのが始まりという。そのきっかけは明暦の大火であった。この火災は明暦3年1月18日(1657年3月2日)から1月20日(3月4日)にかけて連続的に3回発生し、天正18年8月1日(1590年8月30日)の徳川家康の入府以来67年間で人口が約50万人、市域面積約30km²達した江戸の街には、その約2/3(20km²)が灰燼に帰し10万人が犠牲になった。幕藩体制のシンボルである豪壮な天守閣も燃え落ちたこともあり、江戸の街は不穏な空気が漂い武士だけでなく町人も暗澹たる状態にあったが、老中稲葉伊予守正則の出初に元気づけられ、その後出初は正月恒例の行事となり今日に至っている。この大火を契機に江戸の街は大改造され、武家屋敷・寺社の移転、本町通り・日本橋通り等の拡幅、火除地・広小路通りなどがつくられた。

江戸最初の火消組織は、武家火消である寛永6年(1629年)設置の奉書火消、寛永16年(1639年)の所々火消、寛永20年(1643年)の大名火消などがある。徳川吉宗による享保の改革の一環として火災の頻発による幕府財政の悪化を抑えるため、南町奉行大岡越前守に町火消の組織整備をさせた。

組織化では種々混乱も生じたが、隅田川から西を担当するいろは……(「へ」「ら」「ひ」「ん」の4文字を「百」「千」「万」「本」に替えた)48組及び東の本所深川を担当する16組とした。各組は其々個性のある纏と幟を所有していた。纏の頭部は陀志(だし)と呼ばれ、その周囲に馬簾(ばれん)が垂れ下げられている。正月1月4日に町火消は初出を行い、纏振り・梯子のり・木遣り歌を披露した。

図1は一勇斎国芳画「は組の出初」であり、由来は遠方の火事を眺望するためと言われる「梯子のり」では、灰吹き吹き流しの大伎を演じているのであろうか。纏の陀志は7本源氏車二つ引き流しである。一番組に属する「は組」の町域は大伝馬町、亀井町、難波町、堺町、小網町、小船町、小伝馬町、鉄炮町、高砂町、富沢町、長谷川町、油甲等を担当し人足592人を擁していた。画の背景には旧両国橋、浅草寺五重塔が見える。江戸最古の町の一つである大伝馬町は神田祭の筆頭氏子会を務め、「は組」は江戸有数のきおい(氣勢)を誇った。現在、人形町の時計台では回転する「は組」の火消人形が時を刻んでいる。

図2の作者である歌川広重は、江戸町火消安藤家に生まれ家督を継ぎ浮世絵師になった。この作品は、回向院の境内から対岸の薬研堀と大川(隅田川)との境に架かる元柳橋(難波橋)を俯瞰しているものである。回向院は明暦の大火での身元不明犠牲者を集め供養し、その後、地震・海難・火災などの災害による無縁仏を葬る供養塔を建てる寺ともなった。また、この画で梵天(招代:おきしろ)が掲げられた櫓は勸進相撲の場所であることを示し、回向院相撲として天明元年(1781年)から定番化していた。そして明治43年(1910年)に蔵前国技館が建てられるまで続いた。この画はまさに火消魂を継承する広重ならではの作品と言えよう。

菅原 進一(東京理科大学 教授)